
運命の導く先に

神高ミナト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の導く先に

【Nコード】

N0933J

【作者名】

神高ミナト

【あらすじ】

とある事故に巻き込まれて死んでしまった青年が転生した世界は魔法少女リリカルなのはの世界だった。

何故か少年になってしまっていた青年は事件に巻き込まれていく。

プロローグ（前書き）

これは、心に深い傷を持った青年が闇に落ちる前のお話。

プロローグ

この星は嫌いだ。

天を仰ぎながら一人の青年はそう思っていた。

「もう、何も未練はない」

そう呟き、青年は空を仰ぐのをやめて下を眺める。そこにはたくさんの車がかはしっていた。

しかし、青年に本当に未練がないと言われればそれは嘘である。

未練があるからこそ青年はいつまでたってもフェンスに手をかけたまま動かない。

「……」

この星は嫌いだ。だけどやはり青年はいつまでたっても行動に移さない。いざ、行動しようとする足が震えだす。

「……ちっ」

舌打ちをして自分の足を殴りつける。

自分の足を殴りつけながらふと足元を見ると雫がぼたぼたと流れ落ちていた。

空をもう一度仰ぎ見る。

雨など降っていない。

しかし、すぐに気づいた。自分は泣いているのだと。悔しさからぼろぼろ涙が溢れ出す。

「はは、なさけねえ」

乾いた笑いと共に涙はぼろぼろと流れ落ちる。

「なさけねえよほんとに……」

青年は涙をこしこしと服の袖でぬぐうともう一度下を見る。高いと思った。

足がまた少し震える。

「……こええよ、死にたくねえ」

またじわりと瞳から涙が浮かぶ。

青年は大好きだったただ一人の親友を思い返す。
クラスになじめずに数々のいじめにあってきた。いじめは親の都合で転校を繰り返してもなくなることはなかった。

青年はわからなかった。転校を繰り返しても何故か絶対にいじめられたのだ。いじめの内容はひどいものだった。

しかし、青年はいじめ自体を辛いと思ったことはない。いじめられるのが当然だったので受け入れてさえた。ただ、青年のただ一人と呼べる親友がその世界を変えてくれた。

何度目かの転校でその親友に出会い、そして青年を身を挺して救ってくれたのだ。

初めていじめられることが無くなった。

初めての友達ができた。

そして、絆を深めて親友になった。

今までの出来事が当然と思っていた青年にとって、親友がくれた世界は幸せなものだった。

本当に幸せだと感じた。

でも、幸せの時間はそう長くは続かなかった。

青年のことをよく思っていなかった連中がまた青年をストレス解消の対象として手に入れようとした。そのいざこざの際、その事件は起こった。

それは、事故だった。

親友は命を落とした。

青年は自分のせいだと思った。

だから青年は自分を憎んだ。

何故こんな目ばかり会うのか？

青年は世界を憎んだ。

全てに絶望した青年は終わりを望んだ。
だから、死のうと思った。

しかし、いざ死のうと思うと恐怖心から足がすくんだ。なさけなかった。

「……」

願え、さすれば与えられん

「!？」

突然青年に誰かが語りかけてくる。
びつくりしてあたりを見渡すが何もなし。
青年が何事か驚いているなか、謎の声はお構いなしに語りかけてくる。

世界を憎みし闇の波動を持つものよ、願え

「いつたいなんだよ」

世界を変える力を願え

「世界を？」

さすれば与えられん

「どういうことだ？」

何が何だか青年にはわからなかった。突然の声に驚き、そして世界を変える力なんて言われても訳が分らなかった。

欲しくはないか？

「？」

世界を滅ぼす力が

「なっ！」

願えば手に入る。さあ願え

世界を滅ぼす力？

それは、世界を憎み、世界に絶望した青年が望んだ力。

悩む必要はない。

そんな力が手に入るのなら、たとえ藁にでもすがつてもいい。

突然の怪しい声。何が目的かわからない何か。だが、青年にとってそんなことはどうでも良いことだった。

どうせ、死のうと思っていた。

だから青年は

「俺は、力がほしい」

了承した

闇の世界に身を投じた

プロローグ（後書き）

初めまして神高ミナトです。

この作品は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。
はつきり言ってオリ主最強ものです。

なのはシリーズ以外の作品としてはTYPE MOON作品などその他もろもろを予定しています。

つまらないかもしれませんがよろしく願います。

プロローグ2（前書き）

これは、心やさしい青年に救われた不幸なものたちのお話。

プロローグ 2

暗闇の中に自分は漂っていた。

負の感情が渦巻くその中でただただ浮かんでいた。

ああ、自分は死んだんだなと思った。

これが死の世界だと理解した。

負の感情がうずめくこの世界こそが死の世界なのだと。

そして、悲しいと思った。

だって、この感情を作り出している者たちは、みな自らの死を憎んでいるからだ。それはすなわち、自分の生前を憎んでいることと同義。

この者たちに救いはない。

救われることなくこの世界でただ叫び続けるしかないのだから。

これだけの者達が救われないのだと、これだけの者たちが救われていないのだと、そう思うと悲しさで押しつぶされそうになる。

だが、そんなことを考える自分にも嫌気がさす。そう、これはただの同情にすぎないのだと理解したからだ。

どんなに悲しみ、憐れんだとしてもその者たちに救いが訪れることはないのだから。

それでも、救いたいと思った。救われてほしいと願った。その思いに嘘はない。

.....

.....

.....

ふと気付いた。

自分の周りが突然輝きだしたのだ。

その輝きは自分を包み込む。包み込まれながら自分の意識は徐々に薄れていく。

薄れゆく意思の中で、誰かが自分に語りかけてきた。

その思いだけで十分私たちの思いは救われた
そなただけでも、幸せをつかんでほしい
私たちが叶えられなかった事をどうか

そして、かすかに見た。

周りの者たちがほほ笑んでいた。

その光景を最後に、薄れゆく意識は完全に失った。

目を覚ますと自分は泣いていた。

ただ悲しかった。

救いたいと願った者たちに、自分は救われたのだ。

辺りを見渡してみる。そこは見知らぬ家の庭だった。

生前の記憶ではこんな場所は知らない。

「だれがおるん？」

突然声が聞こえたのでそちらに振り向く。

そこには車いすに乗った少女がいた。

プロローグ2（後書き）

神高ミナトです。

今回はちょっと自分でもうまくかけてない気がします。 すいません

……

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

第一話……始まり（前書き）

これは、始まりの物語。

運命を左右する者たちの出会い。この出会いは偶然だったのか、あるいは必然だったのだろうか

第一話……始まり

私、高町なのはは困っていた。

なぜこのような状態になったのかが分からない。

ちゃんと、周りに人がいないことを確認して魔法の鍛錬をしていたし、レイジングハートにも人の気配を感知させていた。

しかし、それなのに関わらず私は困っていた。

なぜなら、目の前で私と同じくらいの年の男の子がニコニコと笑いながら私を見ていたからだ。

まず、何故？ という疑問符が頭から離れない。

私は集中して鍛錬をしていたし、周りが少し見えていなかった。それはしょうがないことだし、不注意でもある。だが、レイジングハートは常に気配感知を行っている状態であり、人が近づいて気付かないはずがないのだ。そのレイジングハートが彼、男の子の存在にまったく気付けなかったのだ。

レイジングハートも驚いているのか動揺しているのか、不安な気持ちに私に伝わってくる。

私は警戒心を強める。

目の前の男の子をじっと見詰めつつ距離をとるため後ろに少しずつ後退していく。だが、男の子はいつの間にか私の腕をつかんでいた。まずいと思い離れようとしたところで

「さっきのなんだ？」

と、目をキラキラと輝かせながら私にそういったのだった。

私は少しあっけにとられながらも、少しだけほっとする。なんとなくだが、この男の子が悪い人には思えない。

よくよく考えてみれば、こんなにも警戒する理由が私にはない。

目の前でキラキラと目を輝かせながら私を見つめている彼をみてどうしてあんなに警戒していたのかが分からなくなった。

「もう一回見せてくれない？」

相も変わらず興味心身に私を見る彼を見て私は笑う。

「うんいいよ。でもその前に、私はなのは。高町なのは。あなたは？」

私は自己紹介をして、彼のことを聞いた。

「俺？ 俺の名前は海斗。八神海斗」

「海斗君だね。私のことはなのはでいいよ」

こうして私は海斗君といろいろとお話をした後に魔法を見せてあげた。

海斗君は驚きながらも私の鍛錬を集中して見ており、時折笑いながらすげえとか言っていた。

一般の人にこんな簡単に魔法なんて見せちゃっていいのかな？ なんて思ったりしたけど、もう見られてしまっていたし、ばれていたのではないと思った。

ふと、まだ魔法のことを話していない親友の二人の顔が浮かぶ。

心の中でごめんとつぶやく。

いつか、話す機会があれば彼女たちにも隠し事をすることなく魔法の事などを話したい。

人通りいつもの鍛錬メニューをこなした折に、男の子に今日はもう終わりのことを告げる。

海斗君ははまた来てもいいか？ と聞いてきたのでうなずいて返事をする。

手を振って海斗君と別れる。

これが、彼との最初の出会いだった。

.....

.....

.....

記憶喪失になってから一年。俺八神海斗はそれなりの毎日を過ごし

ていた。

俺は八神海斗という名前をもらった時のことを思い出す。

俺は突然八神家の庭に倒れていたそうだ。それを八神はやて、俺の家族となってくれた彼女に見つけられて、とんとん拍子に一緒に暮らすこととなった。

今思えば、こんな得体のしれない俺を家族として受け入れたはやてに正直驚きを隠せない。本当に優しい女の子だと思う。

彼女が俺の名付け親である。

彼女と出逢う以前の記憶は全くなく、彼女と出逢った時は何故かぼろぼろと涙を流していた。何か悲しい出来事があつた気がするのだ
が思い出せない。

はやては足が悪く、車いす生活を余儀なくされる。なので病院に通っているのだが、自分も記憶喪失なのではやてとともに病院に通うのは日課となっている。

そこでは石田先生という方によくしてもらっている。

そんなこんなで一年はあつという間に過ぎ、はやてとはもう遠慮しあうことのない絆が出来上がっていた。本当の家族より仲が良いと思うのは俺の思い上がりだろうか？

そんなこんなでいろいろな出会いもあり、昨日なんか高町なのはという魔法少女に出会った。彼女との出会いは衝撃的で、彼女に出会った時の自分の興奮状態が今振り返ると恥ずかしい……
出会ったときになのははたじろいでいた気がする。

恥ずかしい……

しかし、その出会いよりもっと衝撃的な出会いをする事になるとは思いもよらなかった。

とある夜に、突然はやての寝室から光が迸る。

はやての驚く声も聞こえてきたので、急いでその場に駆けつける。
するとそこには、

見たこともない者たちがいた

はやての前で頭を垂れている様子はちょっと驚いたがそれどころではない。

よく見ると、はやては気絶していた。

「ちょ、はやて大丈夫か！！」

そこでようやく謎の四人組の者たちは俺に気付くと同時にはやての状態に気付きあせりだす。

いそいではやてを病院に連れていくのだった。

これが、俺とはやてのヴォルケンリッターたちとの出会いだった。

第一話……始まり（後書き）

神高ミナトです。

うまく書けてるでしょうか？

つまらなかったらすいません。

次回はなるべく早く更新できるように頑張ります。

第一話……始まり2

闇の書の起動を確認した。

あれを起動させるつもりはなかったが、思ったよりプレシアが使えなかったので仕方ない。

プレシアの狂いようはなかなか期待感を煽るものだったが、所詮は落ちこぼれの魔導士。

少しだけ力を貸してやったが、期待はずれに終わった。あの程度の力で体にガタが来るようではその程度だということだ。

しかし、闇の書の主はなかなかどうして？ 最初から目に余るほどの魔力量を持っている。

あれなら多少は体にガタが来てもプレシアのようにすぐぼろぼろになるということもないだろう。

さあ、これからどうなるか楽しみだ。

………

………

………

急いではやてを病院に連れて行ったのはいいが、あわてていたこともあったのだろう、自分たちの格好のことに頭が回らなかった。

「………」

突如現れたなその四人組の格好を改めてみる。

薄い黒の服に身を包んでいた。

どう考えてもこの寒い冬時期に着る服ではない。

それも相成って、突然見ず知らずの四人組がはやてを病院に運んできたのだ。石田先生も当然困惑していた。

そして、その四人組は「主が」や「私は騎士」などわけのわからな

いことを口走っている。

石田先生が俺にどういうことなの？ 的な視線を送ってくるが、俺も脳みそがとつくのとうに限界を超えておりトリップ状態なのでだんまりとしている。

この混沌とした空気ははやてが気絶から目覚めるまで続いた。

「んっ……」

はやてが軽いうめき声をあげて目を覚ます。

「はやて！」

俺はすぐさまはやての元に駆け寄る。

「……あ、海斗君」

俺に気づいて軽くはやては微笑んだ。

そんな中、

「あの、はやてちゃん。あの人たちはいつたい？」

石田先生が彼らのことを聞いてきた。

その言葉ではやても何かを思い出したのか、ばつの悪そうな顔で四人組を見る。軽く苦笑いをしていた。

軽い沈黙。

すると、突然四人組の一人の女性が

「はい」

とつぶやいた。

その跡にはやてが驚くことを言った。

「あの、えっと、彼女らは私の親戚なんです」

「はっ？」

俺は素っ頓狂な声で驚きの声をあげる。それをはやてが「少しの間黙っ」といてな」と軽く俺に呟く。

石田先生も少し訝しげな顔をしていた。

「私を驚かす為にあないな格好までして。でも、私が驚きすぎてもうて」

笑いながらはやてはそう話す。

その一部始終をずっと見ていて俺はさらに頭がこんがらかったのだ

った。

色々なこともあったが何とか丸く？ 収まって今は皆はやての家にいた。

そこで俺は色々なことを聞いた。

四人から、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラとそれぞれの名前を教えてもらう。

彼らはヴォルケンリッターと呼ばれる守護騎士なのだそうだ。何でも闇の書の主はやての守り手だとか。いまいちよくわからないが……そこで彼らは魔法が使えることも知る。

何でもはやてが突然「私の親戚なんです」とか言い出す前には、念話と呼ばれる心と心で話す魔法が使われていたとか何とか？ 実際に後で教えてもらって自分もできるようになった。

最初のほうはヴォルケンリッターたちははやてにかしまっていたが、今は少し柔和な雰囲気になっている。

それは、はやてが彼らのことを家族として認識しているためだろう。彼ら、ヴォルケンリッター達もそんなはやての優しい心に触れて感化されたに違いない。

今はみんなでご飯を食べた後、少しまったりしている。そこで色々話を聞いたわけだが。

「本当に主は闇の書の募集を行わないのですか？」
シグナムが突然そんなことを言った。

「必要ないよ。それに、人様に迷惑をかけたらあかんやろ」

闇の書。これも詳しい話は分からないが、闇の書のページ全てが埋ると膨大な力が手に入るらしい。

ページを埋めるには、魔力のあるものから少しずつ奪っていかなけ

ればならないそうだと。

「しかし、主はやて本当に良いのですか？」

シグナムは少し戸惑い気味に訴える。

「ええんよ。私は皆と一緒にいてくれるだけでうれしいんやから」
心底うれしそうにはやてがそう言った。

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人はどことなく戸惑っているようだった。

「海斗君が家族になってくれたときもそうやったけど、家族が一気に増えて私は幸せもんや」

はやてが本当にうれしそうに笑う姿を見て四人もまだ少し困惑気味だったけど、うれしそうな感じではあった。

「まあ、はやてがそういうなら俺はもう何も言うことはないよ。俺たちはもう家族だ。仲良くしようぜ」

俺がみんなにそういうと、各々驚きながらも同意を示してくれた。

こうして、俺たちは家族となった。

幸せな日々は続いた。

しかし、それをあざ笑うように事体は最悪な方向に進みだすのだった。

第一話……始まり2（後書き）

神高ミナトです。

自分の文章力、構成力のなさに絶望する今日この頃……

日々の精進を怠らず、実力を高めていききたいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933j/>

運命の導く先に

2010年11月11日06時58分発行